

《原著論文》

他者性に拓かれる生命観

——高齢者の現実を通して——

View of Life in Collaboration with Others :
Through the Realities of Aging

福 田 み ゆ 小 崎 眞*
(Miyu FUKUDA) (Makoto KOZAKI)

Abstract : In the increasingly aging society of Japan, it is urgent to recognize the value of the people of advancing age. Because of the existential pain of aging, it is difficult to argue the individualistic value of their existence. We, therefore, explored the relational value of aging.

We found Hamaguchi Eshu's concept of "Kanjinshugi" helpful as it is the understanding of humanity as relational beings. We also found Miyamoto Hisao's "Tasharon (Theory on Others)" useful in developing an awareness of collaborative relationships with others. The hard-to-accept reality of aging can help replace their old value systems with a new one. Also it is possible to transcend the dark side of aging (Korei) and to be awakened to a thought of new dawn (Korei). In spite of the absurdity of life, the aging persons can offer the rest of us wisdom with which to realize a new and hopeful understanding of life.

キーワード：高齢者 (Aging), 他者論 (Theory on Others), 間人 (relational beings), 生命観 (View of Life)

はじめに

現在、日本社会は本格的な高齢社会となっている。その中で、高齢者の存在価値を再認識することが期待されている¹⁾。例えば、自立した高齢者像が理想化され、「社会性の回復 (再就職, ボランティア活動など)」、「進歩発展の再発見 (高齢期になってから進化する部分に目を向ける)」、「価値の再考・発見 (過小評価を避けて高齢期の再評価)」への期待が高まっている。しかし、社会的喪失感をはじめとする、様々な喪失感に苛まれている高齢者の存在価値を語ることは意外と安易ではない。

本稿では、高齢者の存在価値を求める姿勢に一定の評

価を加えた上で、高齢者の関係性に焦点をあてた。まず、家族や友人関係などに確認することのできる同化的人間関係の意義を探索した。特に、浜口恵俊の提唱した「間人主義²⁾」に注目して、高齢者の人間関係の中に、高齢者自身を活かす知恵を探った。さらに、高齢者の内面を蝕む受容し難い老いの現実 (暗さ, 痛み, 不安) に対峙しつつ、その現実と「協働³⁾」することの可能性を宮本久雄の他者論の中に探った。以上の作業を通し、高齢者の生命観を探索した。

第1章 高齢者の実情

第1節 高齢者の実態

日本の総人口1億2752万2千人 (2010年4月20日時点) に対し、65歳以上の高齢者人口は過去最高の2958万人 (2010年10月1日時点) となっている。1950年の

同志社女子大学大学院生活科学研究科
生活デザイン専攻

*同志社女子大学生活科学部

高齢者人口が415万人であったことから考えると60年の間に7倍以上の増加があったことになる。高齢化率(65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合)をみても、1950年の高齢化率は4.9%であったのに対し、2010年には23.1%と増加している。2055年には40.5%になると推計され、今後、高齢化率は高まる傾向にある⁴⁾。加えて、日本の高齢化率が7%を超えてからその倍の14%に達するまでの所要年数(倍化年数)を他国と比較しても、フランスが115年、スウェーデンが85年、ドイツが40年、イギリスが47年かかっているのに対し、日本は24年で到達している⁵⁾。

一般に、高齢化率が7%を超えた社会を「高齢化社会」、14%を超えた社会を「高齢社会」と呼んでいる⁶⁾。現在、日本の高齢化率は23%を超え、5人に1人が高齢者、9人に1人が75歳以上人口という「本格的な高齢社会⁷⁾」となっている。日本は今後も高齢化が進んでいくのと同時にすでに高齢社会が出来上がっているといえる。

第2節 高齢者のイメージ

上述の社会状況にあつて、高齢者は2つの側面から否定的なイメージを付与されている。1つは、暦年齢や既存の固定的な価値判断に起因する社会的評価に関する側面であり、もう1つは、高齢者自身が経験する喪失体験などに起因する自己理解に関する側面である。

(1) 社会的イメージ

日本社会においては、暦年齢が65歳以上であるという年齢的な条件のみで、高齢者とみなされる⁸⁾。心身が老いているか否かの実情は問題とされない。内閣府で算出している高齢化率の対象者は65歳以上の者であり、高齢社会白書に記載される高齢者もここに含まれる。

次に日本社会の高齢者に対する固着概念に注目する。内閣府が実施した年齢・加齢に関する意識調査において「高齢者、お年寄りについて、どのようなイメージを持っているか」という質問項目では、「心身がおとろえ、健康面での不安が大きい」が72.3%と7割を超え最も高かった⁹⁾。実情を明示するために、敢えて、社会が高齢者に対して抱く否定的なイメージを列举してみる。

1) 腰曲がる、頭がはげる、ひげ白くなる。2) 手は震え、足はよろつく、歯は抜ける、耳は聞こえず、眼はうとくなる。3) 杖眼鏡、たんば、温石、洩瓶、孫の手。4) 聞きたがる、死がともながる、淋しがる、心がひがむ、欲深くなる。5) くどくなる、気短になる、愚痴になる、出しゃばりたがる、世話焼きたがる。6) 同じ話

に子を褒める、達者自慢に人は嫌がる¹⁰⁾。

さらに、高齢者に対して、「社会のお荷物¹¹⁾」、「役立たず¹²⁾」と語られ、現代社会が高齢者に抱く固着概念として否定的なイメージがあることが分かる。過去に高齢者は長老として崇められ、知恵を持つ賢者としての役割を担っていた。しかし、機能性や効率性を優先して、社会構造が形成されると、社会の役割期待が年齢によって決まるようになった。その結果、高齢者は心身が衰え、生産性が落ちるため、社会からリタイアする年齢であると定型化されたのである。

(2) 自己イメージ

高齢者が老いを自覚するきっかけの1つとして、高齢化にともなう「喪失体験」がある。以下の5つの喪失があると考えられてきた。

1. 社会的喪失

定年を迎え社会活動の一線から引退し、社会的役割が減少する。社会で果たす役割が失われることに対し無用感や喪失感を感じる。

2. 経済的喪失

仕事を退職し収入が減少することで、経済的にも人に依存せざるをえなくなる。

3. 人間関係の喪失

家族、友人、先輩などとの死別により取り残された寂しさや空しさを感じる。

4. 家族の喪失

死別や子どもの独立などにより、日常的に家族と顔を合わせることが失われることによる寂しさを感じる。

5. 健康の喪失

加齢の影響を受けやすい機能として生理機能、感覚機能(視覚・聴覚・味覚・嗅覚・皮膚感覚)、運動機能などがある。身体機能の低下から自己の身体に対して不安を抱きやすい傾向がある¹³⁾。

上記の喪失感を示す具体例として「体が弱くなって病気がちになった、気力がなくなった、嫁にバカにされる、子どもが冷たくなった、何のために生きているか分からない、年金だけでは不安だ¹⁴⁾」などが挙げられる。「老人にとって毎日とは小さな何かを失うことを意味する¹⁵⁾」との言説もある。このように、喪失体験を通し、高齢者は獲得したものより失ったものに眼を奪われ、その喪失感に苛まれているといえる。それゆえ、高齢者の自己理解として、老いの否定や若さへの憧れ、自己無用感などを挙げるができる。

第3節 否定的イメージを克服する取り組み

喪失感に支配された高齢期を克服しようとする動きの1つとして「老年学」の発展がある。老年学の中で、高齢者は衰退するばかりではなく、進化する能力もあるとの研究結果がでている。また、高齢者の「生きがい論」の研究などが注目されている¹⁶⁾。一般に、生きがいとは主観的感情を表す用語である。内閣府では生きがいのある生涯を送るために、趣味をもったり、友人と交流したり、ボランティア活動に取り組むなど、高齢者自身の積極的姿勢や主体的態度が肝要であると指摘されている¹⁷⁾。

生きがいは、以下の3つの観点から語られることが多い。1) 自分自身だけの満足で成り立つもの（一人称）。2) 子供や孫を育てる楽しみや、友人との交流を通じて生まれる友情などの相手とのつながりを楽しむもの（二人称）。3) 地域社会への貢献や社会にプラスになることを行うことが自分自身へ帰ってくると感じるもの（三人称）である¹⁸⁾。この「一人称」だけでなく、「二・三人称」の生きがいを探し出すことで、より充実した人生となると考えられている。

神谷美恵子（1914–1979）は生きがいを幸福感の一種であるとして、人は生きがい感（心のなかにすべてを圧倒するような、強い、生き生きとしたよろこびが腹の底から湧きあがった形¹⁹⁾）を他者に与える存在であるという。そのことは、人が「他者との内的な交流と未来に向かっての創造的自己実現」を行う存在であること語り、同時に、人が「互いに助け合う相乗の関係」の中に存在することを語っている²⁰⁾。他者との内的交流、他者からの存在承認を通してこそ、生きがい感が噴出するのかもしれない。

第2章 高齢者の生命観とその背景

第1節 所有価値から存在価値へ

近現代社会ではモノ²¹⁾を所有することで、自己の存在証明が確認されてきた。モノは物だけではなく、社会的地位、家族、健康、知識など多岐にわたる。この個人の利益や財産といったモノを所有することは、産業社会のなかでは個人の社会的立場や権威を証明することになった。この所有に関して、西洋近代社会における私的所有権の理論的根拠の一端を担ったのはJ・ロック（1632–1704）である。人は誰でも自分自身の一身については所有権をもっているため、彼の身体の労働、彼の手の動きはまさしく彼のものであるといてよい。労働を費やした者は、誰でも労働によって、共有であった自然状態か

ら何かを取り出したのであって、そこに所有権が生まれるのである²²⁾。

E・フロム（1900–1980）は人間存在の様式としての「to have（所有）」と「to be（存在）」の違いを分析した²³⁾。「to have」によって生を方向づける者とは、自ら望むような自分となるために、外部にある対象（仕事や家庭など）を利用する者のことだ。一方、「to be」によって生を方向づける者とは、人生の目的が自分に方向づけられていることを知り、自分が何を所有しているかではなく、自分は何であるか（存在自体）に価値をおき、生を方向づける者のことを指す²⁴⁾。

自分自身を襲う老いの現実を受容するために、老いを解釈し直し、「to have」から「to be」へ自己の価値観を転換することが必要であるのかもしれない。それは、「モノの領域」（to have）から「行いの領域」（to be）へ視座を転換することである。

神谷は、自分の一生の時間を悠久たる永遠の時間（宇宙的時間）から切り取られた一部分であると考えることが重要であると指摘している²⁵⁾。自主的に時間を捉えなおし、使い方を考えることで、焦りやいらだちから解放され、生かされている日々を楽しみ、趣味や仕事を自己のペースで続けることができるということである²⁶⁾。さらに、時間への洞察を深めることで、超時間的な時間を観ずることもできる。超時間的に時間を観ずることで、自分が生まれても死んでいっても、永久の時間はとまることなく進んでおり、その大きな時間枠のなかの一部として自分が生きていて実感できるという。これは、愛されることよりも愛することに喜びを感じる心が長い生涯にわたり育まれてきた人（心掛けや体質、健康、社会的、経済的、家庭的条件の揃う人）が成し遂げることができる²⁷⁾。この転回²⁸⁾により、人間としてどれだけのことを獲得（to have）したかよりも、おかれたところに存在する在り方（to be）の方が重要性を帯びてくるという²⁹⁾。

この点に関して、老年学の山本思外里は、自己の内面性を見つめることで、深められる心の豊かさが人を倦怠から救い、高齢期の生活に真の意味を与えると評価している³⁰⁾。

第2節 喪失感を超え自己存在を肯定する意義

存在の価値を探索するにあたりP・ティリッヒ（1886–1965）の『生きる勇気（The Courage to Be）³¹⁾』を題材にした。「生きる勇気」とは、自己自身を肯定することを妨げようとするものに抗して、それにもかかわらず自

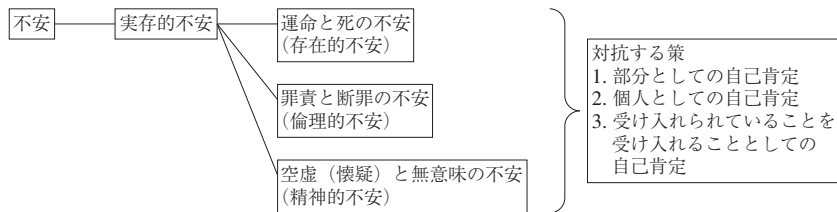


図1 不安とそれを肯定する策（ディリッヒの思索に基づく）

己を肯定することである。ティリッヒは自己肯定への妨げを「不安」とした。さらに、不安を「実存的不安」として、その内実を3つに区分している（図1参照）³²⁾。

1つは「運命と死の不安（存在的不安）」である。これは人間の存在肯定を脅かすものである。人間は、相対的には運命、絶対的には死とされるものを恐怖に変え、対処しようとするが、取り除くことはできない。なぜなら、恐怖は具体的対象を持っており、勇気はその対象を取り除くことによってのみ、恐怖を克服し得るためである。しかし、ここでの不安は具体的対象ではなく、人間の状況そのものが引き起こす偶然性への不安である。2つ目は「罪責と断罪の不安（倫理的不安）」である。これは、人間存在の倫理的自己肯定を脅かすものである。人間は与えられている存在、何かを課せられている存在である。さらに何かを答えること要求されている存在であり、答えることを自らが要求している存在でもありうる。答えることを要求している自分が答えることを要求されている自分に対して否定的な判断を下す。その場合に罪責の不安が生じる。さらにラディカルになった不安、答えることを要求されている自分が完全に否定されたと感じる不安が断罪の不安となる。3つ目は、「空虚（懷疑）と無意味の不安（精神的不安）」である。これは人間存在の精神的自己肯定を脅かす。空虚の不安は精神生活の個別的内容に対する脅かしであり、精神生活の具体的内容に意味を見いだせないでいる状態となる。精神の中核には意図的にそれを創り出すことはできず、それを創り出そうとする試みはさらに深刻な不安を生み出す。無意味の不安は究極的な関わり喪失についての不安も含み、すべての意味あるものに対して意味を与える意味を喪失する。実存の意味の問いに対する答えがないことも不安になる³³⁾。

これら実存的不安を自己自身で引き受けなければならない。ティリッヒは実存的不安の只中にありながらも、自己肯定する策として下記の3つを挙げている。

1. 社会全体に対する部分として存在することで、自己肯定をする。自分が集団や共同体に参加するなど、何

かの一部となることで自己を肯定する。ラディカルな形態として、歴史的には全体主義、原理的には自己の喪失であるとしている。

2. 個人として、自己肯定をする。自己を個別化し、他と比較されない唯一無二のものであろうとする。それにより、自己を肯定する。歴史的には実存主義、原理的には世界の喪失であるとしている。

3. 受け入れられていることを受け入れることを通して、自己肯定をする。存在の根底に捉えられていることを受け入れることによって自己を肯定する。これは絶対的信仰の状態にあるとき可能となる。存在それ自身によって、自らが捉えられていることを受け入れることによって実存的不安を克服し、自己を肯定する。

「生きる勇気」はこのような「自己肯定に反逆するような諸要素」があるにもかかわらず、その自己をあえて肯定するのである。罪悪感で押しつぶされそうな自己存在であるが、それをあえて肯定する倫理的行為が「生きる勇気」である。このように自己を脅かすものがあっても、自己そのものが意味づけられているのである³⁴⁾。不安とそれを自己肯定する策をまとめたものを図1に示す。

第3節 喪失感に苛まれる高齢者の自己受容

老いていく自己と向き合い、自己を見つめるという作業は老いを受容することだと前述した。受容には人や物を身に引き取る、人の意見や要求などを認めて採用する、聞き入れる、容認するという意味がある。高齢期を生きるためには老いていく自己を俯瞰的に見つめ、認め迎え入れることも必要となってくる。

P・トゥルニエ³⁵⁾は、高齢期の自己受容について3つに分類している。第1のタイプは、自分の地位にしがみつき、職業上に引退を拒む者である。行動や支配の世界ではもはや無力になったという劣等感を拒否し、周りに服従や尊敬を要求する。若さへのこだわりや老いの否定が強い者でもある。第2のタイプは、権力本能の対象（職業や子どもの教育など）がなくなり、無気力、無関

心に落ち込む者である。権力本能の裏返しである後悔や苦々しさといったイメージがばかり残り、高齢期を迎えても進化する力が沸かず退化していく者である。第3のタイプは、成人期に得た権力や栄光の昇華に成功し、成人期に抱いていた野心を心的能力の成長に切り替えることができた者である。この型での野心とは「自分自身によって、自分の人間そのものによって、あるいは自分自身であることから自然に生じる輝きによって、すべてを納得させよう」という個人的な精神的権威に基づくものである。トゥルニエは老いの意味として直接的な利害関係から解放され、心を拡大する機会であるとしている³⁶⁾。

第1、第2タイプは「to have (所有)」から転換できていない状態である。一方で第3タイプは「to have (所有)」から「to be (存在)」へ転換している。このトゥルニエの老いの受容を参考にし、山本も高齢者の受容には第3タイプが良いのではと評価している。E・エリクソン³⁷⁾は「知恵とはすなわち死に直面しても人生そのものに対して執着のない関心 (detached concern) を持つことである³⁸⁾」とし、老いつつある自己を受容できた人は知恵という徳があらわれると指摘している。またエリクソンは自我の統合に達することのできない高齢者は、人生のやり直しがきかないという絶望感から、人間嫌いや自己嫌悪に陥ると指摘している。これはトゥルニエの思索を交えたと第1、第2タイプと類似しているのかもしれない。これらから、老いを受容し、「コペルニクスの転換」を成し遂げた人のみ、老いの意味を体得し、老いの価値を信じることが出来ることになるのだろう。山本は老年期について、「人生という急な坂道を上り詰め、ようやく日の出と日没に出会うことのできる見通しの良い山頂にたどり着いたとき、人は初めて自分自身の一度しかない人生を受け入れ、己の敵とも和解できる心境になるのではないだろうか」と例えている³⁹⁾。しかし、「所有 (to have)」から「存在 (to be)」への転換が可能であっても、高齢者を襲う不安は解消されない。

この不安をティリッヒの実存的不安を参考に探ってみる。自己を成立させるもの (所有していたもの)、例えば役職や家族、健康などが喪失するという不安は恐怖と言い換えることが出来る。しかし、何かを喪失するというのは偶然性を含んでおり、予測不可能である。その点では恐怖ではなく、「運命と死の不安」ということができる。また、役割 (会社でつけられた役職や父、母などの家族間での役割) を期待されていた時期 (答えを期待され答えを見いだしていた時期) を喪失し、衰えていく

だけの自己に存在意義を確認できない歯がゆさからは「罪責と断罪の不安」を読み取れる。加えて、人間関係や家族の喪失は、関わりについての不安を含む「空虚 (懷疑) と無意味の不安」との類似点を見出すことができる。関わりのなかでの関心事がなくなることは、空虚さや無意味さにつながる。

このような実存的不安があるにもかかわらず、自己を肯定することが高齢者にとっては重要となってくる。

上記より、自己存在を肯定的に受容することは真に老いと向き合うことになるのではないか。また、ティリッヒの思索から、襲ってくる不安や喪失感があるにもかかわらず、自己を肯定することが可能だとする。この点から、「to have (所有)」にとらわれず「to be (存在)」志向になることで真の生きがいや生の方が得られるというのは、実存的不安を自己肯定する策 (志向転換の1つ) として有効であるともいえる。「to be (存在)」として自己の存在を肯定的に受容し、老いの価値を深めていくことにつながるからである。

第4節 自己受容の課題

高齢者にとって、主体的に自己と向き合い、自己の価値を転換し、生きがいを創出し、老いを受容していくことが重要となる。しかし、一方で、自己を受容することの難しさも課題として生じてくる。生きがいを見出せず、老いていく自己を受容できない高齢者は、離脱、排除の対象になりかねないという課題である。

例えば、社会から高齢者が離脱させられ、高齢者自身も社会から離脱していくという「離脱理論⁴⁰⁾」は高齢者問題を論じる文献でもよく語られている。現代社会は資本主義、合理主義、近代的自我の影響を強く受けている。社会は生産性や機能性を重視するため、高齢者が社会から離脱することで社会は機能的な形で維持される。加えて「離脱理論」では老化するにつれて人は活動や関与から身を引いて行くのが、本質的で自然な状態とされる。したがって、高齢者自身も老化により社会的関係が縮小化することは避けられないという観念に立ち、社会から離脱する。社会関係からの離脱によって、余分なエネルギーを消耗することがなくなった高齢者は、健康も安定し、心理的幸福感も増すことになる。このように社会と高齢者の両方が身を引いていく形が、「離脱理論」では理想的であるとされる。この理論を用いれば、高齢者は自己に否定的なイメージしか持たず、高齢者は自然と排除の対象とみなされる。

高齢者が自己と向き合い、生きがいを見いだすこと、

老いを受容し、生き生きと自立した生活を送ることに異議を唱えるつもりはない。しかし、存在意義を見出せない高齢者は自分自身の現実を受容できず、自己と葛藤することになる。さらに、存在価値だけに関心をはらう価値観は、自己存在に重点を置いたため、他者との交流をも自己にとっての存在価値のみを判断基準として扱う可能性がある。この自己完結的な生命観では、老いを自己の価値観で捉え、自己満足的に受容するという結果を導く。これは自己確立を重視し、自己主体、自己中心的、自己依拠的な面から老いを自己完結的に受容した生命観だといえる。

第3章 関係を軸にした高齢者の生命観

高齢者に対して、その存在価値を尊重する自己完結的な姿勢も重要であるが、自己完結し得ない現実に向き合う知恵も必要である。そこで本章は、他者との関係概念を中心においた生命観を考察する。「個は常に全体のなかの個である以上、必ず全体および他の個との関係の上に成立しているものであり、関係性が個の在り方と本質的に関わっている⁴¹⁾」といわれるように、他者との関係性のなかに高齢者の生命観の本質を探究する。そこで、本章では、2つの関係概念に焦点をあてる。一つは、家族・友人関係などに確認することのできる共通性に根差した人間関係の意義を探究する。さらに、高齢者の内面を蝕む受容し難い老いの現実(暗さ、痛み、不安)との関係性を哲学的思索に学びながら探る。

第1節 間(あわい)という関係

老年学などの社会科学は欧米に起源をもつ。欧米文化は理性に基づく個人の自律性や進取性が近代的人間観を形作る要因と想定した。この欧米文化で広まった自己依拠的な個人主義文化を日本で運用しようとするひずみが生まれる。なぜなら日本は個人主義よりも集団主義的であり、人と人との関係を重視する文化を持つといわれているためである。しかし、浜口恵俊⁴²⁾は「日本を社会的・文化的に論じる場合、日本人は行動における自立性を欠き、社会・集団・組織の中に取り込まれてしまった人間であり、あるいは世間体、恥の意識、恩・義理などの社会心理や社会倫理に強く拘束された人間であると目されることが多い⁴³⁾」とし、個人主義に対抗する集団主義としての二元論的なアプローチだけでは日本文化は語りつくせないと指摘する。欧米文化では自立性の強い個人という存在が社会生活の基本単位とされていた。個人は集団と折り合いをつけながら、それぞれ自律的に振舞

える資質をもつ存在だと想定されている。ここから個人は集団に対して常に優位に立つ絶対的存在であることがうかがえる。そうすると、必然的に個人の基本能力(自己決定、自己責任を伴う自立的な能力)を欠く日本人は個を埋没させた集団主義者というレッテルをはられることになる。したがって、浜口はこの文化的誤解を回避し、個人主義の対立項としての集団主義という視点を避けた。そして浜口独自の視座から、日本型の関係システムとしての「協同団体主義⁴⁴⁾」を提唱した。この社会編成では、団体の成員が協力して集団の目標達成に努め、その結果として得られた利得の分配により、成員は生活上の欲求の充足と福利の確保ができるという相利共生関係となる。

このような日本型の関係システムを構築するために、浜口は「間人」主義の重要性を説く。「間人」とは人間の存在形態のタイプを表象するもので、日本型の人間関係における価値観、関係的な基盤となるものである。「間人」は人と人との間柄を重視し、関係性そのものを自己の中核だと意識するような人のことを指す。「間人」を明確にするために個人を比較対象に挙げる。個人の関係は個別体を加算的に集約させた形態となるが、「間人」の関係は様々な関係体を四方から集約させた輻輳形態となる。個人と「間人」の関係を図に表したのが図2である⁴⁵⁾。

ABの関係が個人同士の場合、ABは孤立した絶対的な個人であり、それぞれが分離独立して生活空間を確保している。そこでの関係は物を交換するのと同じように手段的で戦略的に操作可能なものだと思なされる。個人が他人を助ければ、必ず相手もこれに応えてくれるという期待によって成立する相互作用である互酬性が重視される。さらに浜口は個人主義を3つのカテゴリーに分類している(図2参照)。1つ目は「自我中心的主義」である。これは自我構造を人格のなかに意識的に確立し、そうした各自の自認的自我が社会生活の中心に据えられるべきだとする理念である。個人の自由な意思決定は、いかなる集団・制度にも拘束されえないとする思想であり、個人間の葛藤は社会的契約によって回避され、社会的秩序の維持がはかられる。2つ目は「自己依拠主義」である。自分のことは他人に頼ることなく自分自身の力でもって、しかも自己責任において成し遂げるべきだとする理念である。他者からの依存拒否、他者不信、自足原則を理想としてかかげ、自律的な態度を推奨する。3つ目は「対人関係の手段視」である。自立した人間同士の関係は相互に自己の存続にとって有用な手段であり、

他者性に拓かれる生命観

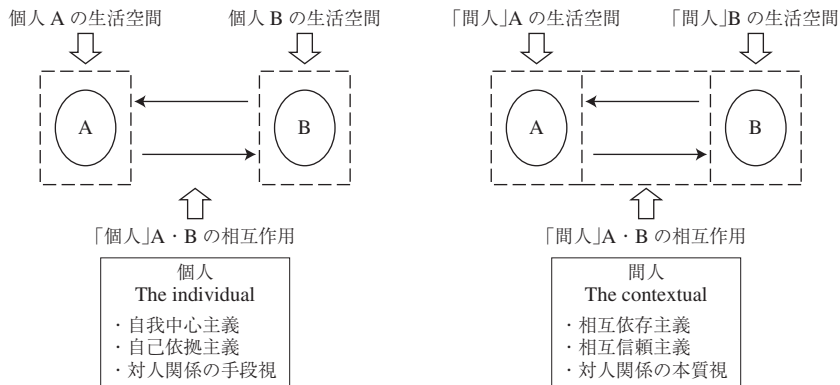


図2 個人と「間人」の関係

活用して差し支えないとみなす、ギブアンドテイクや戦略的観点に立つ理念である。機能的な役割関係におけるフォーマルな形態の人間関係が情感を交えずに成立することになる⁴⁶⁾。

一方「間人」の場合、ABは孤立しておらず、人との間にある「人間（じんかん）」という関与を主体とする。互いに接している共有された生活空間があり、関係は機能上プラスかマイナスかというような判断で持続したり中断したりするものではなく、互いに利益を与え合う互恵的な関係となる。浜口は「間人」主義も個人主義同様に3つに分類している（図2参照）。1つ目は「相互依存主義」である。社会生活を送るのは自力だけでは事実上不可能であり、互助が不可欠という思想である。2つ目は「相互信頼主義」である。プライバシーなど関係なく、無防備のまま自己を露わにすることによって絶対の信頼を得ようとするものである。これにより相互に間柄、「人間（じんかん）」への信頼が可能であれば自分の期待するものに相手はきっと応えてくれるに違いないという確信も生まれてくる。3つ目は「対人関係の本質視」である。相互信頼の上に構築された間柄は、戦略的な観点から操作される手段的なものではなく、それ自体の価値を尊重していこうとする理念である。

欧米文化的な視座に立ち、日本の集団主義を個人主義の対極に捉えたと個が埋没している印象を受ける。しかし、日本人は個人同士の関係ではなく、関係性を軸とした独自の日本型システムを構築している。この場合、他者の生活空間をも含めた関係性のなかで自己と他者は関係の中に個として成り立つことになる⁴⁷⁾。よって浜口が唱えた「間人」は二元論的視座ではない。「間人」は個人の1つの特定形態であると解される。

加えて、「間人」の構造的特性として、人間は常に確

立された不動の存在ではなく、構造上「ゆらぎ」を内包していると浜口は指摘する⁴⁸⁾。なぜなら人間は常に合理的選択のみによって行動する理性的存在ではないからである。つまり「ゆらぎ」を伴い、複雑に入り組んでいるものが人間だといえる。また、自己と他者の間には様々なモノやコトが含まれている。これを「間（あわい）」と理解することができる。「間」は「ゆらぎ」を含み常に変化するものである。特定のイメージに固執せず、流動的に物事をとらえることができる。関係が変化しても、それに対応できる術を日本人が持っているのは、「間」を含んだ関係形成を行っていると判断しうる。自己が他者との関係に埋もれないためには互いが差異を認め合い、適切な「間」の空間を保つことも重要であるといえる。

「間人」主義については、社会学者の船津衛も評価している。船津は「間人」主義について、日本人の社会的行為（社会における態度や姿勢）を規制する最も基礎的な原理であり、個人主義に色づけられた欧米型の枠組みからの考察ではなく、日本を内側から捉えるアプローチであるという⁴⁹⁾。船津によれば、日本人は人間存在を自己と他者とのかかわりのなかで意味づけるため、人間関係それ自体に価値をおいている。行為の基底にあるのは「間人」主義的発想、つまり「間人」主義は自己と他者の相利共生を目指す主義であるといえる⁵⁰⁾。

以上のことから、自立的な高齢者の姿が期待される社会状況では、自立や自己責任などの個に特化した高齢者像は自己中心的傾向性を内包することとなる。それは利害関係を含むような、個人同士の関係に陥りやすい。「間人」主義が語るように、相互信頼の上に構築された間柄を重視し、それぞれの間にある関係自体の価値を尊重する事を通し、ライフコースの違いをも超えた対人関

係の本質が深化される。しかし「間人」主義は高齢者と他者という関係性においては機能するものの、高齢者と高齢者自身の内面的葛藤には迫っていない。

第2節 異質との関係—高齢者とその内面—

テレビコマーシャルや健康をテーマとした番組では、老いを厄介なもの、見たくない、異質なものとして扱い、それをなるべく遠ざける方法を特集している。2010年には「終活」という言葉がユーキャン新語・流行語大賞の候補語にノミネートされた。「終活」とは、人生の終焉をより良く迎えるための前準備のことだ。終活をすることで、死や人生を見つめなおすといった人も多い。つまり、老いやその先にある死をなんとかして自己内に受容しようとする動きがあるといえる。しかし高齢者自身にとって老いとはすべてを受容しきれものではない。どうにかして老いを受容できたと自己満足しても、それでも他者からの突きつけや自己への問いというのは際限がない。

高齢者が直面する他者は自己に都合のよい他者だけではない。本節では、納得のいかない痛みを伴う自己の内面性を研究対象とする。消したい過去やネガティブな思いを抱えたままの高齢者の内面性を異質なモノとして探求する。「高齢期というのは高齢者が高齢期以前に体験した歴史的、社会的、経済的要因の複合的結果⁵¹⁾」だとすると、高齢者自身が否定したい過去、現在および未来の自分さえ、自己では受け入れられない異質なモノとして存在することになる。つまり異質なモノを抱えたまま、自己受容を求められるのだ。

異質なモノからの問いかけにより、再び老いが異質なモノや厄介なモノへと変化する可能性は捨てきれない。自己内で完結できない老いといかに共存するのか。高齢者のなかにある異質なモノとどう向き合うかということ、哲学的研究の「協働態」に依拠し考察する。「協働態」とは従来の共同体は異なる意味を有している。共同体とは共時的、時同、実体から成る様態であり、閉ざされた反歴史的な自己同一性を表す表現である。一方「協働態」は協力、エネルギー⁵²⁾、流動体から成る、異なるものが互いに協力して働きつづなる動態を表す表現となる。異なるものとは、同化しえないものである。ある側面からみた老いとは、避けたい、見たくないもの、自己と同化しえないものとなる。よって、老いも異なるものの1つである。高齢者は自己に迫る老いという懸念がある限り、その不安や痛みと向き合い生きていくしかない。その付き合い方として「協働態」という関係性に注

目することで新たな生命観を構築できるのではない。抽象的な表現には限界があるが、これまでは老いていく現実を自己に同化する、または受容する生命観しかなかった。しかし、その現実を異質な存在として、自己内で流動体として捉えることで、異質なモノと向き合えることはできないだろうか。過去と現在と未来で異なるモノを「共同」させるのではなく、「協働」させることはできないだろうか。人間は自己の道理にかなわない、納得できないものに対し、苦しみや悩みを抱く。それは高齢者においても同様である。高齢期に入ると、成果主義や応報主義からの脱落、努力では補いきれないことや運命に身をゆだねるしかない出来事が多く起きる。それらは、時に自分の満足や納得の判断基準を超える壁となり目の前に立ちはだかる。その苦しみ自己さえ超えた視座の中で生きることができれば、それは自明の理（自分の都合や意味）を解体することにつながる。つまり自己中心的、自己完結的な価値観の解体である。異質なモノによって、自己が解体され、自己が他者に拓かれ、新たな自己を発見できる可能性が現実化する。積み上げてきた生命観を壊すには勇気がいるが、人生経験を積んだ高齢者だからこそ、新しい自己を発見し直す知恵を持っているのではない。その知恵により、自己と他者の関係性にも転換が起こるのではないだろうか。「協働態」に根差した生命観の構築が今後の課題となるように思われる。

おわりに

高齢者に付与された既存の生命観に批判を加えつつ、新たな生命観の構築に挑戦してきた。この課題は高齢者問題に限ったことではない。生産性や効率性を重視し、個人としての生活を営み、人間関係を作っている、現代社会に生きる全ての世代に対して、突きつけられている課題である。高齢者の生命観への問いは、同時に、あらゆる世代の生命観への本質的問いでもある。高齢者が直面している現実は一層厳しく、解決困難な課題が多くある。しかし、単に苦悩の現実を避けたり、変容したりするのではなく、その現実に行むことにも意味があるように思える。今日までの足跡を振り返り、今後の生活や自己を捉え直すという意味で、高齢者は年齢の高い者という「高齢者」ではなく、「考案者」といえるかもしれない。黎には「青黒い色、暗い⁵³⁾」という意味がある。命には明るさだけではなく暗さも含まれている。この暗さを見つめることで命は深まる。自己完結的に他者なるモノを同化し、他のモノの暗さを明るくしようとする必要はな

い。「黎」には「黎明」という意味が含まれる。「黎明」とは「夜明け、明け方、新しい事柄が始まろうとすること⁵⁴⁾」という意味である。つまり「考黎者」とは自己の老いを見つめ、異なるモノ（暗さ、痛み、不安）をも含めた自己と向き合い「考える」ことで、新たな生命観を拓く者ということになる。高齢者の生命観への限らない思索は、現代社会を生きる私たちに新たな生命観を構築するための手掛かりを提示してくれるだろう。

今後、日本社会の文化的文脈の中で、暗く異質なモノ（黎）を抱える高齢者の内面性に迫った生命観へのさらなる思索が期待される。

注

- 1) 老年学とは老年あるいは老化を共通の研究課題とし、多様な具体的諸問題に対して総合的に対処するための視点を提示する学問である。加齢変化や中高年の問題に関する科学的研究や、人文学的見地からの研究などが定義されている。
- 2) 濱口恵俊『日本研究原論「関係性」としての日本人と日本社会』有斐閣、1998年。
- 3) 宮本久雄『他者の魅了－アウシュビッツからのエクソダス－』創文社、2008年。
- 4) 内閣府『高齢社会白書』2010年、3頁。
- 5) 薬事日報 HP『「高齢社会白書」高齢化率は最高の23.1%－世界に例をみない速度(2011年6月10日付)』(<http://www.yakuji.co.jp/>)、(参照日2011年8月5日)。日本の高齢化率が7%に突入したのは1970年、14%に突入したのは1994年、21%に突入したのは2007年である。(総務省『国勢調査』2000年／国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口』2002年／内閣府、前掲書、2010年)。
- 6) 「高齢化社会」という用語は、1956年の国際連合の報告書において、当時の欧米先進国の水準を基にしつつ、仮に7%以上を高齢化した人口と呼んでいたことに由来するのではないかとされている。また「高齢社会」については、高齢化率が7%からその2倍の14%に到達するまでの期間(倍化年数)が、高齢化の進展のスピードを示す指標として国際比較などでよく使われていることから、高齢化率14%を一つの基準として、これを超えたものを「高齢社会」と呼んでいるものと考えられる。
- 7) 内閣府、前掲書、2010年、3頁。
- 8) 同書、2頁。
- 9) 内閣府『年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査』2004年。
- 10) 『老人六歌仙』、小澤利男「医療からみた高齢者の生きがい」『生きがい研究15』(財)長寿社会開発センター、2009年、40頁。禅僧仙厓(1750-1837)は江戸時代に博多聖福寺の住職として活躍した。
- 11) Rowe, J. W and Kahn, R. L. *Successful Aging*, 関根一彦訳『年齢の嘘 医学が覆した6つの常識』日経BP、2000年、(小澤、前掲書、39頁)。
- 12) Coni, N., Nicholl, C., Webster, S., Wilson, K. J., *Lecture note geriatric medicine*, Blackwell, 2003年、(小澤、前掲書、40-41頁)。
- 13) 武田雅俊「Ⅱ老年医学 第3章 老年病各論 精神疾患 10.1 高齢者における精神疾患の特徴」大内尉義・秋山弘子 編集代表『新老年学第3版』東京大学出版会、2010年、1186頁。
- 14) 井上勝也「老年期と生きがいの考察」、『生きがい研究13』(財)長寿社会開発センター、2007年、6頁。
- 15) 朝日新聞『シネマパラダイス「クレアモントホテル」』2011年5月21日 朝刊 佐賀全県 34頁。
- 16) 健康・生きがい開発財団 <http://www.ikigai-zaidan.or.jp/> (参照日2011年11月28日)。
- 17) 内閣府、前掲書、2010年。
- 18) 川崎市 HP『概要版：地域が主役☆川崎発！ニューシニア健康づくり大作戦 高齢者パワーアップの推進』(<http://www.city.kawasaki.jp/35/35kosui/35kosui/keikaku/pdf/9kara12.pdf>) (参照日2012年1月30日)。
- 19) 神谷美恵子『生きがいについて サクセスフル・エイジングの秘密』みすず書房、1966年、山本思外里『老年学に学ぶ』角川学芸出版、2008年。
- 20) 山本思外里『老年学に学ぶ サクセスフル・エイジングの秘密』角川学芸出版、2008年、154頁。
- 21) 本稿では「モノ」や「コト」というカタカナ表記を用いる場合がある。これは漢字表記にすると、漢字からのイメージに捉われてしまうことを避けるため。
- 22) ジョン・ロック『市民政府論』鶴飼信成訳(岩波書店、1968年)、田中文子『無所有の系譜－日本における所有問の歴史－』『所有のエチカ』大庭健・鷲田清一編、ナカニシヤ出版、2000年。

- 23) エーリッヒ・フロム『よりよく生きるということ』小此木啓吾監訳, 第三文明社, 2000 年, 33-34 頁。
- 24) 山本 前掲書
- 25) 神谷のほかにはスイスの精神病学者であるカール＝グスタフ・ユング(1875-1961)も高齢期を転換期だと捉えている。(山本, 前掲書, 71-158 頁)。
- 26) 神谷美恵子『こころの旅』日本評論社, 1974 年, 157-178 頁。
- 27) 山本 前掲書, 1-158 頁。
- 28) 神谷はこの転換を「コペルニクスの転回」としている。そもそも, 「コペルニクスの転回」とはカント哲学の立場を示す言葉である。主客関係の転換をコペルニクスによる天文学説上の転換にたとえて呼んだものである。神谷は, 発想を根本から転換することを目指し, コペルニクスの転回との表現を用いたと思われる。
- 29) 神谷 前掲書, 71-158 頁。
- 30) 山本 前掲書, 71-116 頁。
- 31) パウル・ティリッヒ『生きる勇気』大木秀夫訳 1995
- 32) 不安には実存的不安の他に病的不安も含まれるが, 本稿では研究対象に当てはまらないため, 詳細は省く。
- 33) ティリッヒ 前掲書, 68-88 頁。
- 34) 同書, 第 4 章「勇気と参与」132-173 頁, 第 5 章「勇気と個人化」174-234 頁, 第 6 章「勇気と超越」235-281 頁。
- 35) ポール・トゥルニエ【Paul Tournier】(1898-1986) スイスの医師であり作家。
- 36) ポール・トゥルニエ『老いの意味-美しい老年のために』山村嘉巳訳 (ヨルダン社, 1975 年), (山本 前掲書, 参考)。
- 37) エリック・エリクソン【Erik Homburger Erikson】(1902-1994) ドイツ出身のデンマーク人。精神分析学者。
- 38) Erikson, E. H, *Insight and Responsibility*, (Norton, 1964), 133 頁。(神谷 前掲書)。
- 39) 山本 前掲書, 96 頁。
- 40) Cumming, H. and Henry, W. E. 『Growing Old』 Basic Books New York 1961 武川正吾「Ⅲ社会老年学 第 1 章 2. 社会学からのアプローチ」, 大内尉義・秋山弘子 編集代表『新老年学第 3 版』東京大学出版会, 2010 年, 1588 頁)。
- 41) 藤沢令夫『「よく生きること」の哲学』(岩波書店, 1995 年), 167 頁。
- 42) 浜口恵俊【はまぐち・えしゅん】(1931-) 和歌山県出身。社会学者。
- 43) 浜口恵俊『「間(あわい)の文化」と「独(ひとり)の文化」比較社会の基礎理論』知泉書館, 2003 年。
- 44) 浜口 前掲書, 25 頁。
- 45) 浜口は人間を〈にんげん〉とし, 〈にんげん〉主体システムは「擬・個体」「原・個体」「原・関体」という 3 つの類型があるとしている。「原・関体」が「間人」となる。個別体を〈にんげん〉モデルとして捉えたのが個人となるのに対し, 関係体を〈にんげん〉モデルしてとらえたのが「間人」である。個人, 「間人」のなかには, 人, システム自体, 関係性といった様々な事柄がすべて含まれ語られる。(浜口 前掲書, 100-120 頁)。
- 46) 浜口 前掲書, 213-214 頁。
- 47) 同上。
- 48) 同書, 88 頁。
- 49) 船津衛「〈書評〉浜口恵俊著 間人主義の社会 日本」, 日本社会学会『社会学評論 34(2)』有斐閣, 1983 年, 179-182 頁。
- 50) 船津 前掲書, 179-182 頁。
- 51) 武川 前掲書, 1589 頁。
- 52) エネルゲイアとは, アリストテレス哲学の概念である。事物の生成とは可能的なものが現実的なものに発展することであるが, 前者をデユナミス, 後者をエネルゲイアという。現実態や現実性を意味する。
- 53) <http://www.jkn21.com/stdsearch/displaymain> (参照日 2012 年 1 月 28 日)。
- 54) 同上。

(2012 年 11 月 9 日受理)